# idea

ニュースレター「イデア」

2022.5

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、
「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

1｜二言三言｜　土地家屋調査士　小岩邦弘さん
3｜団体紹介｜　せんまや夜市実行委員会
5｜地域紹介｜　第13区自治会（室根）
7｜企業紹介｜　株式会社フジテック岩手（藤沢）
8｜博識杜のフクロウ博士｜　地域運営の落とし穴㉒　自治会広報とデザイン
9｜センターの自由研究｜　伝説調査ファイルNo.8「かさこ地蔵」


**今月の表紙**

道ばたに並ぶ六尊のお地蔵様(「六地蔵」)。そもそもお地蔵様とは、正式には「地蔵菩薩(じぞうぼさつ)」と言い、仏教における信仰対象(菩薩の一尊)です。仏教には「六道」という考え方があり、六地蔵は、地蔵菩薩が六道に行くために姿を変えたものと言われます(諸説あり)。ところでこの六地蔵、一尊だけ笠をかぶっていません。これはもしや……!?(自由研究)


idea

発行　いちのせき市民活動センター　〒021-0881　一関市大町4-29　なのはなプラザ4F　Tel 0191-26-6400　Fax 0191-26-6415
せんまやサテライト　〒029-0803　一関市千厩町千厩字町149　Tel 0191-48-3735　Fax 0191-48-3736
ホームページ:https://www/center-i.org/　メール:center-i@tempo.ocn.ne.jp


# おしらせ

**イベント**

## 令和4年度「せんまや夜市」

本誌「団体紹介」にてご紹介した「千厩夜市実行委員会」では、令和4年度、「せんまや夜市」を約3年ぶりに通常開催します。

10月までの毎月第2土曜日(8月のみ14日)に、千厩町の新町・本町商店街を歩行者天国にし、各種屋台が出店するほか、毎月様々な企画をご用意！詳細はホームページからご覧いただくか下記までお問合せください。

**開催日**:4月～10月　第2土曜日
※8月は14日の開催
**場所**:千厩町の新町・本町商店街内
**URL**:http://www.senmaya-yoichi.com
**問合**:0191-53-2735
(せんまや夜市実行委員会会長:伊藤)

**募集**

## 一関市国際交流協会会員募集！

一関市国際交流協会では、国際交流に関心のある方、他国の言葉や文化にふれてみたい方など、一緒に活動していただける会員を募集します。詳しくはQRコードを読み込むか下記までお問合せください。

**活動内容**:
・国際交流に関する研修、セミナー
・料理や文化を通じた交流イベント
・海外学生の受入(ホームステイ)等
**年会費**:
〈個人会員〉 2,000円／人
〈団体・法人会員〉 10,000円
**問合**:0191-34-4711
(一関市国際交流協会)

**情報**

## 藤沢地域の魅力を発信する情報誌「Charcas(チャーカス)vol.2～観光編～」発刊

藤沢の地域協働体「藤沢町住民自治協議会」の事業部会では、2022年3月に藤沢の魅力を発信する情報誌『Charcas～観光編～』を発刊しました。

地域内の観光地・施設やイベントなどの紹介に加え、取材時のインタビュー動画もYouTubeで視聴できます。

同誌は藤沢市民センターのほか、藤沢近隣と平泉町の道の駅等に配架しています。詳しくは下記までお問合せください。

**問合**:0191-63-5515
(藤沢市民センター内
藤沢町住民自治協議会事務局)

**情報**

## 厳美市民センター山谷分館「震災資料展示室」

岩手宮城内陸地震の際に避難所となった厳美市民センター山谷分館に「震災資料展示室」が開設されました。県立一関工業高等学校の土木科が震源地等をドローンで空撮した写真や映像、模型などを展示しています。見学希望の際は平日8時半～17時までに下記へお問合せいただくかホームページをご覧ください。

**開館日**:見学希望者に合わせて随時
※山谷分館は利用申込がある時のみ開館
**場所**:厳美市民センター山谷分館内
(一関市厳美町字入道200)
**URL**:genbicc.jp(厳し美しの里協議会)
**問合**:0191-29-2205
(厳美市民センター)

**情報**

## NPO法人のみなさんへ事業報告書の提出について

NPO法人は、毎事業年度終了から3か月以内に前事業年度の事業報告書を所轄庁に提出する必要があります。報告書の提出がない法人については、特定非営利活動促進法に基づき、過料通知書を地方裁判所へ送付します。また、3年以上にわたって提出が行われない場合は、NPO法人の認証が取り消されることがありますので、ご注意ください。NPO法人に関するご相談等については、下記までお問合せください。

※一関市にのみ事務所を設けている場合の所轄庁は一関市役所のまちづくり推進課です。

**問合**:0191-26-6400
(いちのせき市民活動センター)

**募集**

## 「いちのせき市民フェスタ22」参加団体募集

一関市内で活動を行う市民活動団体を中心に、個人・企業等が一堂に会し、活動紹介をはじめ、各種体験等により交流を図りながら、市民のまちづくりへの参画を促進する「いちのせき市民フェスタ」。このイベントに参加する団体を募集します(30団体/～5月末まで)。

なお、市民フェスタは定期的に会場(旧町村)を移動することにしており、今年度は千厩地域の下記会場で開催します。詳しくは下記へお問合せください。

**開催日**:令和4年8月28日(日)
**場所**:千厩アイスアリーナ
千厩農村環境改善センター
**問合**:0191-26-6400
(いちのせき市民活動センター)

## まちの写真展

スタッフがまちの1コマを切り取ります。

作品名「ようこそ霜後(そうご)へ」

霜後地区(一関市萩荘)の集会所敷地内にある「親子の木彫りフクロウ」。本体は地元の大工さんが制作し、地元女性12人で組織する「霜後かあちゃんクラブ(SGK21)」が季節に応じたテーマで定期的に衣替え。地区住民や訪れた人を楽しませています。

旧町村別の人口動態等を共有します。

2022年**4月1日**付
(2022年3月31日現在住民基本台帳より)
※外国人登録者含む

| 一関市全体 | | 前月比 |
|---|---|---|
| 人口 | 110679 | -714 |
| 世帯数 | 46238 | -4 |
| 出生数 | 34 | 6 |

| | 人口 | 前月比 | 世帯数 | 前月比 |
|---|---|---|---|---|
| 一関 | 54887 | -353 | 24392 | -7 |
| 花泉 | 12283 | -79 | 4694 | -2 |
| 川崎 | 3336 | -19 | 1285 | 1 |
| 千厩 | 10027 | -94 | 4089 | 1 |
| 大東 | 12273 | -66 | 4925 | 3 |
| 東山 | 6028 | -56 | 2282 | -3 |
| 室根 | 4545 | -11 | 1777 | 0 |
| 藤沢 | 7300 | -36 | 2794 | 3 |

1/61/110,679

# 小岩邦弘さん

土地家屋調査士小岩邦弘事務所代表で、不動産賃貸業・測量設計を行う(有)アラヤ産業の代表取締役。日本大学工学部土木工学科卒業後、東京のディベロッパーや舗装業者を経て平成元年にUターン。実家の一関コンクリート工業所(平成14年に閉業)と(有)アラヤ産業を継承しつつ、土地家屋調査士事務所を開業。現一関商工会議所会頭。昭和37年生まれ。

**第95回**　土地家屋調査士・測量士　小岩邦弘さん　×　いちのせき市民活動センター　センター長　小野寺浩樹

## 親子・家族間で「イエ」の資産共有を
## ～所有者不明土地を増やさない～

**所有者が亡くなった時などに、慌ててその実態把握をすることが多い土地・建物の所有権や登記名義人。「相続」しても「変更登記」をせぬまま放置されるケースが多く、「所有者不明土地」が問題視されてきました。そうした実態を受け、令和6年4月から「相続登記」が義務化され、法改正以前から相続登記をしていない不動産についても適用されます。果たして「所有者不明土地」の実態とは？**

**小野寺**　今年2月に当市で初めて行われた特定空家の行政代執行は大きな注目を集めましたが、土地家屋調査士の業界にもそうした事案はあるものですか？

**小岩**　行政代執行ではないですが、我々の業界で今一番の問題が「所有者不明土地」。一関にも少なからずあるんです。簡単に言えば、相続していない、していても登記されていない土地。名義人の住所変更がされていない土地もあります。

**小野寺**　どのような時に問題になってくるんでしょうか。

**小岩**　土地家屋調査士は「筆界確認」と言って、土地の法的な境界を明確にさせることが仕事なのですが、依頼者の隣接地の名義人に確認をとらなければいけません。しかし、変更登記がされていなかったり、住所変更がされていないと、所有者を見つけ出すまでにかなりの時間[※1]と費用がかかってしまいます。

**小野寺**　土地の購入や処分を諦めざるを得ないケースも出てくるということですよね。

**小岩**　依頼者が個人だと諦めることもありますが、公共事業の対象地だと諦めることも簡単ではありません。例えばこの問題が大きくなったのは東日本大震災。震災復興の公共事業をしようにも所有者が見つからず、事業が大きく遅れたという経過があります。これを機に様々な法改正が進められ、令和6年からは相続登記や住所変更が義務化され、手続きをしないと過料[※2]が科せられます。

**小野寺**　実は我が家でも最近になって曾祖父のまま名義が止まっている田んぼの道路が発覚しました。それを考えると他人事ではありませんね。

**小岩**　「相続人いなければ国とか市がもらうでしょ」と言って放置している人も多いですが、現行の法律にそうした対応はありません。「相続」という法律が令和5年4月に施行予定ではありますが、要件が厳しいので、期待しすぎないように気を付けて欲しいです。

**小野寺**　相続したくない、相続する人がいない土地などを国がもらってくれるということですか？

**小岩**　買い取ってくれるわけではありません。逆に10年分の土地管理費相当額の負担金[※3]を納付して、国に管理してもらうという流れです。国庫に帰属したら、普通財産として国が処分することもあるようです。

**小野寺**　「山を手放したい」という声はよく耳にしますが、森林も対象なのでしょうか？

**小岩**　対象ではありますが「境界が明らかではない土地」「帰属又は範囲について争いがある土地」は却下要件とされているので、我々土地家屋調査士による筆界確認調査測量が必要。その時に先ほどお話したような所有者不明土地が隣接地だった場合、簡単にはいかないですね。

**小野寺**　なるほど。確かにハードルは高そうですが、国として救済措置を立てたということ。小岩さんたちの立場からはどう見ていますか？

**小岩**　管理されずに放置されるよりは良いと思います。本来、土地の管理責任は所有者にあり、土地が原因で第3者に被害を与えた場合には損害賠償の対象になるわけですから。

**小野寺**　「どうせ俺の代で終わりだからさ」という人もいますが、「終わり」で終わらないんですよね。本人が死んでも土地は残りますから、責任放棄みたいなもの。

**小岩**　相続税の対象になる資産価値がある土地だと、それなりに意識している傾向がありますが、評価額の低い土地や固定資産税の通知が来ないような土地だと、軽視されがちですよね。

**小野寺**　固定資産税の通知が来ない土地もあるんですか？

**小岩**　それはありますね。今は「法定相続」で、権利者が複数いますし、親子間でちゃんと共有をして欲しい。自分の土地がどこにあるのか、現在の名義人が亡くなったら誰がどのように管理していくべきなのか[※5]。管理できる人がいないのであれば、早めに処分を考えるべきです。

**小野寺**　まずは登記がどこまでされているか確認すべきですね。

**小岩**　そう、固定資産税の通知だけでなく「資産証明[※6]」を取ると良いかもしれません。同一家族であれば、父親や祖父の分を取ることもできますので。

**小野寺**　その上で相続されていない土地があれば登記する、と。

**小岩**　登記費用がかかるので、管理はしても登記はしないという人がいますが、義務化によって令和9年4月までに登記しないと結局過料がかかりますよ。住所変更もぜひお願いします。

**小野寺**　相続権利者が増えるほど費用もかさむので、早いうちに動くべきですね。これも「イエを守る」ことの一つかと。

**土地家屋調査士小岩邦弘事務所**
**住所**　一関市青葉一丁目6-4-205
**電話**　0191-23-8214

※1　職務上権限として土地家屋調査士が請求できるものにも限度があり、固定資産税の納付者の情報等は請求できないため、登記簿で所有者が確認できない時には、周辺住民への聞き込みや、お寺の過去帳などを遡ることもある。海外移住者とやりとりすることも。
※2　正当な理由なく登記申請を怠ったときは、10万円以下の過料が科される。

※3　現状の国有地の標準的な管理費用(10年)は、粗放的な管理で足りる原野約20万円、市街地の宅地(200㎡)約80万円。
※4　共有名義不動産は共有資産代表者にのみ納税通知書が送付される。道路は非課税になることも多く、その場合は納税通知書に記載されない。
※5　「家族信託」という仕組み(財産管理法)も有効。　／　※6　市役所税務課で取得可能(一名義につき手数料300円)。

# 生活における「楽しみ」を創り続けて

## せんまや夜市実行委員会

**せんまや夜市実行委員会**

一関市千厩町の４つの商店街で開かれる「せんまや夜市」の企画運営を行う。昭和57年、地元商店会の有志を中心に緩やかに組織化。企画広報係（企画立案、広報）と会計係を設け、４月から10月までの第２土曜日（８月は14日に固定）に開催する夜市を切り盛りする。出店店舗等は随時募集中。

TEL：0191-53-2735　会長（伊藤周平）

写真：令和４年４月開催の「せんまや夜市」の様子

### 昼、物が売れないなら、夜売ろう

大型ショッピング店の進出や、昭和54～56年の北海道・東北の冷害の影響もあり、昭和後期には全国的に商店街の売り上げ低迷が続いていました。千厩町の各商店街でも、「今日も売れなかった」とシャッターを閉じる光景が当たり前となりつつある日々……。そんな中、愛宕商店会の中で上がってきたのが「昼売れないなら夜売ろう」という声。これが「せんまや夜市」の原点でした。

昭和55年、千厩町千厩の愛宕商店会有志を中心に開催した「あたご夜市」から始まった「せんまや夜市」の歴史ですが、農家や果樹園に声をかけるも相手にされず、参加すると言いながら当日来ない業者もいるなど、散々なスタート。翌年は愛宕地区で発生した大火で開催自粛。３年目は隣接する「千厩新町振興会」と共に実行委員会を結成し「せんまや夜市」として開催するも、いまいち盛り上がりにかける結果に……。

規模の小ささに原因があると考え、「せんまや本町通り振興会」、「四日町振興会」にも参加を促すと、最長で１・５㎞の歩行者天国となり、月に２回開催するなど、「せんまや夜市」は徐々に盛り上がりを見せていきました。

### 次々生じる課題にも話し合いを重ね続けて

規模の拡大で来場者は増えた半面、様々な課題が。まず向き合ったのは、夜市開催エリアの中央に位置する本町通りに来場者が集中してしまうという現実。当初からの出店者にお叱りを受ける中、各商店会の特性を活かした構成にすることで来場者を分散・周遊させる作戦に。空き地が多い愛宕・新町には、地元にはない珍しい業種を出店させるなど、全体のバランスを考えるようになりました。

次に頭を悩ませたのが「子どもたちが夜遊びをするようになってしまった」という学校からの電話。同様に、夜間に歩行者天国を行うことによる不満（歩行者天国エリアに事務所を構える企業への弊害や、騒音）も聞こえてくるようになっていました。

課題に向き合う中で見えてきたのは、「商人を中心とした実行委員会であるがために『売る側目線』になっており、お客さんや地域住民に寄り添えていなかった」ということ。改めて夜市の在り方を考え、「『物を売るだけの夜市』から『楽しい夜市』へ」転換を図ることを会員間で共有。お客さんが楽しめるイベントを第一に考え、買い物は二の次としていくことにしました。

地元の小学生からは「夜市は宝物」という声が上がっており、同会会長の伊藤周平さんは「せんまや夜市は『月に一度の公認夜遊びの場』として、先生や地域の大人が見守りながら、子どもたちに千厩の魅力として発信する場にしていきたい」と語ります。

### 全国でも珍しい、住民による住民のための夜市

10周年を迎えた平成３年、夜市を開催している東日本エリアの商店街に声をかけ、「東日本夜市サミット・シンポジウム」を開催した同会。また、その頃には「せんまや夜市」の存在が地域外にも知られ、全国から視察が来るようになっていました。その際に驚かれるのが実行委員会形式での開催ということ。全国的には商工会が主体であることが多いため、「商工会も行政もわき役に徹している姿に驚きを感じるようです」と、事務局顧問の小野寺維久郎さんは誇らしげに語ります。

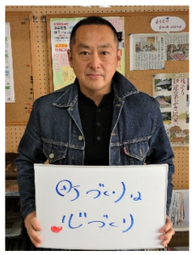
現在は国道４５６号線の新町・本町商店街エリア約５００ｍを歩行者天国にして実施している夜市。街頭には前日から「千厩夜市音頭（昭和60年に公募したもの）」が流れ、ワクワクした気分を作り上げてくれます。

商店街の店舗では夜市に合わせたセールやイベントなどを行い、町内外から多い時で１００店舗以上が路面に出店。開催月に合わせた恒例企画もあり（８月の「燈立」や10月のハロウィン等）、歩行者天国の通りは老若男女でにぎわいます。地元の小中高生が友達同士で楽しむことができる数少ないイベントでもあり、「子どもたちには千厩に夜市があると自信をもってもらいたい」と語る伊藤さんは、「今後は若い人たちに実行委員会の中心を担ってもらい、幅広いコネクションで回りを引き込んでいくことが大切」とも続けます。

コロナ禍で２年開催を見合わせてきましたが、令和４年４月より再開した「せんまや夜市」。話し合いを大切にしながら歴史を積み重ねている同会の活動は、地域住民にとっての「生きがい」と「思い出」、そして地域への「愛着」を創り出しています。

## Q.「夜市」開催を通して得たものは？

**会長**

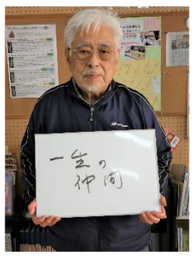



A. 町づくりは心づくり

いとう　しゅうへい
**伊藤周平さん**

地元へのＵターンを期に夜市にかかわるように。平成29年12月から８代目会長に就任し、子どもたちの「宝物」としての夜市を守り続けています。

**事務局顧問**




A. 一生の仲間

おのでら　いくろう
**小野寺維久郎さん**

実行委員会設立当初から夜市に関わっており、現在に至るまでの紆余曲折も見てきました。本町商店街で「小野久スポーツ」を営んでいます。

## - Photo gallery -

### 変わらぬデザインで

主要企画が毎回異なるため、毎回（月）チラシを作成し、千厩・川崎・藤沢地域に全戸配布。あえてテイストは変えません。

### 初盆を迎える年は……

８月の夜市だけは14日を開催とし、「燈立」を行います。初盆を迎える家の人がこの行燈を持ち帰るのが夜市の慣例です。

### 活動発表（披露）の場

「新町ＪａＪａ馬プラザ」の特設ステージでは音楽ライブが恒例。様々な団体・個人が参加（披露・演奏）します。

### せんまや夜市と言えば

平成９年に登場した夜市キャラクター「せんたくん」「まやちゃん」。夜市会場には不定期出没！子どもたちの人気者です。

# 顔の見える範囲で作る「共助」の仕組み

**室根第13区自治会（釘子）**

３つの部落会（旧行政区：「矢越会（第５部落）」「矢越第６部落親睦会」「第７部落会」）の連合会のような位置づけで昭和57年度に発足。自治会は部会制（生活環境、文化体育、産業、女性）で、70戸約220人が暮らす。

左の写真：平成17年の矢越山整備事業時の集合写真（中央の建物が羽山神社（通称：薬師様））。

室根

## 第13区自治会

### 地域のシンボルを守りながら

標高519m、「森は海の恋人植樹祭」で全国的にもその名が知られる「矢越山」。中腹に矢越村時代の村社・矢越神社が、山頂には852年勧請の薬師如来を安置する羽山神社もあり、鎮守の山として地域を見守っています。

矢越山自体は第3区自治会、第12区自治会、第13区自治会にまたがりますが、羽山神社とその参道（＝登山道）を有するのが第13区自治会です。

県道本吉室根線が地区の中央を通り、同路線上の市営バス境田バス停から星商店の手前までが同自治会のエリア。この左右に集落が広がり、矢越山の登山道の付近には同自治会が制作した矢越山の案内看板が。

ツツジが見頃を迎える6月には多くの登山客が訪れ、その時期に合わせて行う矢越山の整備作業は今年で24年目。山頂周辺の刈払い作業から始めた同事業は、案内看板や道標の設置に加え、登山道の階段整備（プラスチック杭や補助ロープの設置等）にまで発展しています。

「作業内容によっては過酷なものも。その後の『さなぶり会』を楽しみに多数の住民が汗を流します」と、9代目自治会長の畠山和弘さんが話す通り、その参加者数は例年約60人と、ほぼ全戸から一人は作業に参加。コロナ禍前には農家組合と共催で焼肉などの「さなぶり会」を行い（コロナ禍ではパン等の配布のみ）、住民の親睦を深める機会にも位置付けています。

### 部落会と自治会の連携で実情に合わせた活動を

3つの「部落会」を束ねるような形で成り立つ第13区自治会。各部落会も組織化しており、自治会の役員は各部落会選出の人材で構成されます。

自治会の事業は部落会と連携しており、花壇整備の実動やコンクールへの応募は部落会毎ですが、花苗や各種経費に関しては自治会が負担。河川清掃や道路愛護等の環境整備活動も同様で、自治会から各部落会に降ろし、地域住民により身近な部落会が活動主体となります。

この仕組みで同自治会が取り組む事業に、空き家・留守宅の草刈りボランティア作業があります。各部落会がそれぞれのエリア内で整備が必要と判断した空き家・留守宅があれば、ボランティアで草刈り作業等を実施し、係る経費は自治会が負担。現在は第5部落会・第6部落会で数軒の草刈り作業を担っています。

また、令和4年度からの試みとして、有料（1回3千円で、その半額は自治会が補助）で除雪依頼に応じる仕組みも構築。実は第5部落会には積雪によって孤立してしまう場所があり、部落会の有志が除雪をしているということが自治会として仕組みを構築した背景にあります。

ちなみに、同自治会では2年程前から自治会費に対し「4月1日現在自宅に居住しておらず、且つ、前年度年間概ね200日以上居住していない世帯は会費を免除とします」という規定を追加。高齢者等の長期入院や施設入所などによる留守宅（空き家）発生の現実を鑑み、こうした様々な対応策を部落会との連携で進めています。

### 稼いで補助！狙いは人づくり

総会資料を拝見する中で目に留まったのが「地域内サークル・同好会活動補助」という項目。10名以上の団体で、年2回以上の活動を予定している自治会内の同好会・サークルを対象に、自治会が5千円～1万円の助成をするというものです。現在は「釣り同好会」のみの利用ですが、以前はカラオケ同好会や手踊り同好会など、いくつか利用があったとのこと。

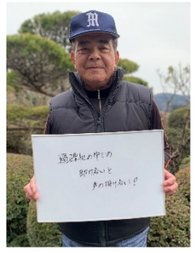
その狙いについて事務局長の千葉恭平さんは「飲み会でも麻雀でも何でも良いから、とにかく集まることが大事。地域行事には参加しにくくとも、自分の好きなことなら参加する。その中から自然とリーダーが出てくれば」と、集落の盛り上げはもちろん、人材育成の意味合いを込めます。

実際、釣り同好会の会員は50～60代が中心ですが、自治会からの補助で主催する釣り大会（自治会員向けに案内）には若い人や家族連れが参加。夏まつりなどの行事にも出店（協賛）するなど、住民の交流機会に一役買っています。

この補助金は県道草刈りの委託費を財源としており、「親睦に使えるお金を捻出するために草刈りで稼ぐ」という姿勢に思わず感心。部落会や同好会という、生活において身近な主体による活動を推進することで、自然と顔の見える関係性が築かれています。

## Q.集落の自慢は何ですか？

### 副会長

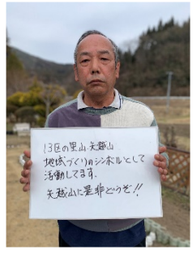


おやま　さとし
**小山智さん**

矢越会（第５部落会）の会長で、自治会の副会長。矢越山登山道の入口に自宅があるため、登山客とコミュニケーションを図りながら、鎮守の山を守ります。

A. 過疎化の中での助け合いと声の掛け合い！

### 事務局長




ちば　きょうへい
**千葉恭平さん**

盛岡に通勤していた時期も含め、20年以上に渡り事務局を担ってきました。定年退職した今年からは後継者の育成にも注力していきます。

A. 13区の里山・矢越山。地域づくりのシンボルとして活動してます。矢越山に是非どうぞ!!

## - Photo gallery -

### 登山道の階段を

毎年6月に行う矢越山登山道の整備作業。ここ数年は階段へのプラスチック杭設置を進めています。休憩中の様子（平成30年）。

### 大掛かりな夏まつり

コロナ禍前は歌謡ショーをメインに実施していた夏祭り。人脈を駆使し、特設の屋台やステージを設置していました。

### こっちが本番？

矢越山の登山道整備後に行う「さなぶり会」の定番は焼肉。第5部落の集会所前の広場で作業の疲れを癒します（平成30年）。

### 世代を超えた各種交流

新年会では餅つきで子どもたちと中高年世代が、女性部では女性学級を通じて幅広い年代が交流します（写真はコロナ禍前）。

# 企業紹介

地域企業の理念にせまります。

## 藤沢　株式会社フジテック岩手

農業の機械化が進み始めた昭和51年、現代表取締役社長の父（現会長）が「農家の皆様に寄り添い、地域に貢献したい」という想いから「有限会社藤沢農機商会」として創業。昭和62年に「株式会社フジテック岩手」に改称すると、農業に関連したあらゆる需要に応じるように、平成３年に水道事業部、平成８年には土木事業部を設置。平成23年から土木本管工事等の事業と自動車関連の事業を強化し、その一環として届出済未使用者の専門店「エコカーパーク川崎店（平成27年）」「エコカーパーク一関インター店（令和元年）」をオープン。藤沢町藤沢の本社も合わせ、市内３か所で各種事業を展開中。

### 地域の営み、生活に寄り添って

#### 地域のニーズを把握し、お客様に「感動」を与える

「質の高い様々なサービスを地域のお客様に提供し、感動を与える」をモットーに、長年のノウハウを活かした農業資機材・各種機械販売メンテナンス（アグリ事業部）のほか、自動車販売・点検整備検査（自動車事業部）、給排水設備・宅内配管（水道設備事業部）、環境保全の為の各種工事・一般土木建設業（土木本管事業部）などを中心に展開する株式会社フジテック岩手。「なぜこの部品を交換するか」「どのような施工をしたか」を丁寧に説明し、顧客への明朗明解な対応を心がけています。

顧客満足度の向上を図るため、市内全３店舗の口コミ・評価を分析し、リピート率（また来たくなる）、紹介率（他の人にオススメしたくなる）をチェックするなど、地道な取り組みも忘れません。

自動車関連事業を軌道に乗せた現代表取締役社長の千葉昌嗣さんは「事業拡大を目指し、本来の農機具の販売整備にこだわらず、市内の方々が何を求めているのかというニーズ把握を行いました。その中で、岩手県では1世帯あたりの自家用車保有率が３台を超え、ほぼ1人1台持っているという現状に着目し、市内における『ここが一番』という自動車整備工場・販売店を目指そうと決めました」と振り返ります。

#### 一関で一番のステータス企業を目指して

千葉さんが帰郷した平成23年、同社の主力だった農機具の販売・整備事業は、農業人口の減少と共に需要が減少していました。当時の社員は18名で平均年齢は53歳。離職率も高い現状を受け、社員アンケートを実施すると、社員も今後の経営に不安を抱いていることが判明します。

主力事業の転換を決意した千葉さんは、東日本大震災の影響で需要が伸びていた「土木本管事業」と、生活に不可欠な「自動車事業」の強化を実施。農機具の販売・整備でお付き合いしていた顧客に自動車を勧めたところ、それが好評となり新規顧客獲得にもつながりました。

また、若い人材を育成するため、給与の仕組みを「見える化」。社員の評価をポイント化し、給与に反映するなど、社員のモチベーションアップを図りました。加えて、年２回は面談を設け、社員の悩みにも向き合います。

社内改革に着手して約10年、新店舗開設もあり、社員数は91人に増え、平均年齢は36歳、離職率も大幅に減少するなど、大きく状況が変化。社員からも「同世代の先輩も多いので相談しやすい。地域の方と関わりながら仕事ができるのもやりがいを感じる」という嬉しい声が。さらなる人材育成のため、専門技術習得のバックアップにも力を入れます。

地域の小学生に地元観光地の招待券を贈るなど、地域貢献も行う同社。「子どもたちから『大きくなったらフジテック岩手に入りたい』と憧れられること」「令和20年までに県内３番目の上場企業を目指す」という目標を掲げながら、農家や地域のニーズに寄り添い続けます。

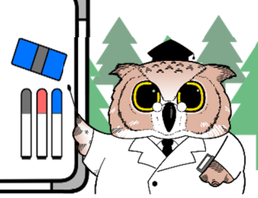
1 昭和59年から多様な農機具の販売・整備で地域農家を支えてきた本社外観。
2 代表取締役社長の千葉昌嗣さん。
3 来客時は真っ先に駐車場で出迎え、帰りも最後までお見送り。

DATA
〒029-3405
一関市藤沢町藤沢字大母216-9
TEL 0191-63-3194
HP http://fti.co.jp/





今月のテーマ
地域運営の落とし穴㉒
自治会広報とデザイン



# 博識杜のフクロウ博士

第38話

## 担当者の個性が見える!?「自治会広報」

昨年、藤沢町の地域協働体・藤沢町住民自治協議会で**「自治会広報コンクール」**が初めて催され、当センターも審査員としてお誘いをいただきました。審査員は広報いちのせき『I-style』編集部、岩手日報社一関支社、岩手日日新聞社と錚々たる顔ぶれの中、僭越ながら参加させていただき、応募があった藤沢町内の自治会広報を拝見しました。ただ拝見するだけならいいのですが、コンクールとなると賞をつけなければならず……。

主催である同協議会の目的は、**自治会活動強化のために広報という手段を高めたい**というものであり、今後の自治会広報の発展のために、申し訳なさを感じながらも審査させていただきました。先に述べておきますが、**自治会で広報を出していること自体が、素晴らしい取り組み**です。出したいと思いながらも出せずにいる自治会もあれば、過去には出していたものの、従事する人が確保できないことから廃止した自治会もあったり、地域によって様々な事情がありますので、必ず広報紙を出せというものではありません。

当センターでも毎月、情報誌『idea(この冊子)』を発行していますので、入稿までは一字一句間違いがないか、記事に誤解を与える表現はないかなど事実確認に必死です。とは言え、我々は業務の一環で制作しているので、ある程度の時間や手間を費やせるのであって、**自治会広報に携わる事務局や総務部の方は、地域の一役（無償）**なのです。なかなかできる仕事ではないので、担当者の交代が難しいのも頷けます（前号参照）。

さて、実際の自治会広報を見てみると、手書きで手作り感があるもの、写真がメインなもの、元行政職員が関わっているのかもしれないと推測してしまうような書式のものなど、従事している方の人となりが垣間見えて楽しいものです。中には、回覧板に挟み込むような連絡文書タイプもありましたが、それも立派な広報紙であり、どれも**‘いかに住民のみなさんに関心を持ってもらうか？’という視点**で各種工夫が凝らされていました。

## 地域づくり活動や市民活動は、「広報」に苦戦する傾向あり

私（いちのせき市民活動センター長・小野寺）自身、地域づくり活動や市民活動に携わって17年が経ちました。この間、テーマ型の事業や地域づくりに関する講座など、多岐に渡り主催してきましたが、ずっと困っていたことがあります。それは、**‘我々の業界は、伝えるためには文字量が必要になる！’**ということです。

誰もがすぐにイメージできる商業施設等の「○○フェア」やバーゲン、各種音楽イベントなどは、少ない文字量と写真でも表現がしやすい。だから、オシャレな感じだったり、インパクト重視の広報物が通用しますが、地域づくりに関することは、イメージしにくいことが多いため、いちいち**解説**や**注釈**をつけないと伝わらない……。

「広報」というと、華やかなキラキラしたもの、デザイン性を重視して作りたいと思う人も少なくないのですが、キラキラしたデザインは、地域づくり活動には、実は不向きだったりします。

見出しやキャッチコピーも同様で、「○○%OFF！」「一関に○○が初上陸！」と、文字量が少なくても通じる業種・事業がある一方、地域づくり系になると、「参加で気づく地域づくり」とか「見て・聞いて・体験して」のような、インパクトに欠ける言葉を選ばざる得ない。我々は、というより個人的には、「キラキラ系は諦めよ」というお告げを聞きました（笑）その代わり、**‘しっかり説明して、趣旨を理解してもらうために伝える努力（工夫）が大事**である’と考えています。

そもそも、**自治会広報紙をはじめ、情報を発信する目的は「周知」ですから、知ってもらうことが目的で、インパクトを与えることが目的ではない**のです。**地味で、文字要素が多くなってしまったとしても、分かりやすく表現することが大事**です。せめて**見出しやレイアウト**くらいは頑張りたいですね。

また、自治会情報の周知のためにせっかく発行している広報紙ですから、「開催報告」の記事だけではなく、**「予告記事（何の目的で、どんなことをやるのか？）」**や、地域の役を知ってもらうために**「○○役の解説（役員さんのお仕事風景を取材する等）」**などのコーナーを設けてみるのも良いのではないでしょうか。

当センター佐々木作成の過去のチラシ。「ひらめ」と「板」で「ひらめいた」となっているもので、伝えにくいものを連想ゲーム仕立てにした傑作チラシ（笑）

ミッション67

# 伝説調査ファイルNo.8「かさこ地蔵」

誰もが一度は聞いたことがある民話「かさこじぞう」。昭和57年、小学２年生の国語の教科書に一斉採用されたこともあり、全国各地に知られるようになります。この時採用になったのは岩崎京子作の『かさこじぞう』で、各地に伝わる民話を再話したものでした。雪国を中心に各地に同様の話が古くからあったとされ、実は当市域内にも「笠地蔵発祥地の一つ」と推定される場所があります。推定に至った背景を調査しました！

※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

## ■青少年の健全育成を願って

花泉町花泉字上舘（清水集落）の道路沿いに建立されている六尊のお地蔵様。**昭和58年に「花泉ロータリークラブ」が建立**したもので、その台座には「かさこじぞう」という文字が。六尊のお地蔵様のうち、五尊は編笠を、一尊はてぬぐいを被り、背後に立つ看板には次のような説明が書かれています。

笠地蔵の民話は全国に四ケ所あるといわれますが、花泉地方には次のような民話が伝えられています。

「昔、米がみのらず人々は苦しんでいました。大みそかの日、お爺さんはお婆さんの編んだ笠を売り、せめてお婆さんにいしいものを買って帰ろうとまちに出かけましたが、まちの人々もお金がなく、一つも売れませんでした。一つも売れませんでした。がっかりして家にたどりつくころ雪が降り出し、道ばたの六地蔵さんたちがとても寒そうでした。お爺さんは可愛そうに思い、笠を一人一人の地蔵さんにかぶせてあげました。笠は五人分しかなく、一人分はお爺さんのほおかぶりをはずして地蔵さんにかぶせてから家に帰りました。お婆さんは、お爺さんいいことをしましたね、といい二人は粗末な夕食をとっていました。そこへ、ザック ザックと雪を踏む足音がしました。さっきのお地蔵さんたちがたくさんの宝ものを運んで来てくれたのです。」

お地蔵様に守られながら、優しい心、思いやる心、いたわる心をはぐくみ、子供たちの健やかな成長を願い、この民話を永く伝えるため、ここ清水地区を民話発祥地と推定し、六地蔵を建立しました。

建立以来、地域の皆さんの保存で大切にされています。皆さんもどうぞ保存にご協力ください。　※原文ママ

建立に至った背景を「花泉ロータリークラブ」に伺うと、「**青少年の健全育成のため**」とのこと。当時、全国的に青少年の暴力行為が問題となっており、そうした背景もあるかもしれません。しかし、気になるのが「民話発祥地と推定」という記述。その裏付けとなったものとは……？

## 地域をつなぐ六地蔵様

「かさこじぞう」こと六地蔵様をこの場所に建立したのは「花泉ロータリークラブ（当時の会長は故・佐藤紀明氏（花泉歯科医院院長））」ですが、その当時から宝泉寺やその檀家女性陣などを中心に、日常的に手を合わせてきました。

毎年８月24日は「地蔵盆の日」とされており、この日には宝泉寺が運営する「認定こども園花泉保育園」の園児たちが「地蔵盆参り」に訪れ、団子などをお供えし、手を合わせています。

また、清水集落では平成７年から、集落公民館事業として「編みがさ作り教室」を開いており、ここで制作した編笠を六地蔵様に被せています（講師を務めていたのは10頁左上で紹介している加藤孝さん）。

なお、この六地蔵を建立する以前には、この道路で事故が多発していましたが、建立後は交通事故が起こらなくなったとか！

### まめ知識　全国で「かさこじぞう」が伝わる場所とは？

「全国に四か所」という看板の記述が気になり、調べてみると、「かさこじぞう」やそれに類似した民話が伝わる地域は実はたくさんあり、柳田国男監修の『日本昔話名彙』には、岩手県の事例として**紫波**と**江刺**の名前が出てきます（**残念ながら花泉は記載なし**）。

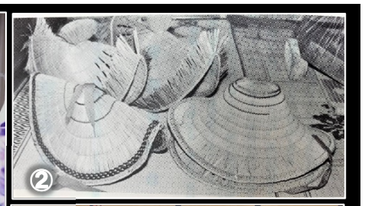
多くは雪国（東北、北陸地方）の町村ですが、山梨県、千葉県、島根県にも同様の民話があったようです。読み比べてみると、思わぬ発見があるかも!?



# 民話「かさこ地蔵」のルーツを探して

「『かさこじぞう』発祥地の一つ」と聞くと、民話に出てくるような六地蔵様が古くから建立されていたことを想像してしまいますが、清水地区の場合、六地蔵様が建立されたのは昭和58年。建立の経緯としては「青少年の健全育成につながる事業を検討する中で、花泉町の、特にも清水地区には『かさこじぞう』の民話に通じる要素があったため、発祥の地と推定して六地蔵様を建立した」というもの。

そこで、**「『かさこじぞう』の民話に通じる要素」**を探してみました！



①清水集落で商売として編笠を制作していた最後の一人・加藤孝さん（平成24年他界）。平成20年過ぎまでは注文があれば編笠を作っていたとのこと。「かさこじぞう」建立時にはすでに孝さんしか編笠を制作できる人がいなかったため、当初は孝さんが一人で六地蔵様への編笠を作っていました。
②清水集落で昭和59年以前に作られていたと推測される編笠（『花泉町史』に掲載されていたもの。その出典は「広報『はないずみ』」）。
③孝さんが制作し、旧花泉公民館に寄贈（平成20年２月）した編笠。

## ルーツ1　約200年前に清水集落に伝えられた編笠の技術

『花泉町史』の「特産品」に関するページには次のような記述があります。

*「文政年中（1818～30）**清水町佐藤喜八**なるもの、伊勢詣のついでに諸国を巡り、**岡山で編笠を作ることを研究**し、帰国して、佐々木梅治という人とはかって、**栗原郡大岡・志波姫地方の畳表藺草を求めて編笠製作を普及**した。**一時は原料の藺草を栽培**し、女の編手も多く、需要に応じきれない時代もあったが、今は衰退した。その他竹細工などが商品となった。これらの家内工業は、生産が増えるにしたがって、**商品として農閑期には行商**に、**毎月ひらかれる金沢・涌津・清水・日形の市日に売りさばく**など結構収入の助けとなった。」*

つまり、清水集落には**約200年前に岡山県から編笠の技術を持ち帰った人**がおり、そこから家内工業として清水集落に普及しているのです。その後、商売としての編笠は、**現在の80歳代の人たちのお姑世代までは続いてきた**そうで、全盛期は**清水集落のほぼ全戸の女性が「現金稼ぎ」として編笠作りに勤しんでいた**のだとか！

なお、「一時は原料の藺草を栽培し」という記述がありますが、清水集落内ではなく、油島地区の沢田で栽培をしていた人がいたとのこと。実際には仕入れ（栗原のほか、九州からも）が主だったそうです。

### まめ知識　一般的には「すげ（菅）」で作る「すげがさ」

清水集落で作られた編笠は畳製造等に用いられる「藺草」が使われていましたが、民話『かさこじぞう』に出てくる編笠は、「菅笠（すげがさ）」と呼ばれる「すげ（菅）」という植物で作られた編笠のようです。

なお、当市域でも農家は「菅笠」を使っていたものの、当市域内で作られていたという情報は見つけられず、宮城県域で生産されたものを購入していたようです。右画像は一関市民俗資料館に川崎地域の人から寄贈された「菅笠」。

## ルーツ2　金沢で行われた「つめ市」

民話『かさこじぞう』では、お爺さんが年越しのための食べ物を買うために、まち（民話によっては「市」）に出て編笠を売ろうとします。

先述の『花泉町史』にも記載があるように、かつて花泉地域では複数箇所で定期的に「市」が開かれていました。市が開かれる日は毎月決まっており、**金沢で開かれる市は「６」がつく日**（ちなみに、清水の市は「３」がつく日）。

そのため、**年越しに近い12月26日に開催される市は「つめ市」**と呼ばれ、**年越しの準備をする客で賑わった**のだとか。この金沢の「つめ市」と清水集落の距離感・関係性などが、民話に通じるところがある＝背景の一つとして考えられます。

## ルーツ3　二桜城址にあった宝泉寺

現在、「かさこじぞう」が建立されているのは八幡神社の参道前であり、違和感を感じる人もいるかもしれません。実はこの八幡神社のある場所は**「二桜城」の跡**でもあり、かつてこの場所には坂上田村麻呂が開創した**「天台宗宝泉院」**がありました（807年に「花立山宝泉院」と号したが、永和年代で廃寺となった）。1492年、二桜城主清水玄蕃葛西信実が宝泉院跡に禅寺を開基し「金寄山宝泉寺」と改め、その後（慶長年間）、現在地（花泉町花泉字馬場30）に遷ったとされています。

つまり、現在の**「かさこじぞう」が建立する場所の山手には寺院があり、その麓に六地蔵があったという可能性はあり得なくもない**、ということ。そうした歴史的背景も、清水集落が「かさこじぞう」発祥地の一つとする由縁の一つかもしれません。

＜協力＞　宇津野弘人さん（宝泉寺住職）、藤堂隆則さん（花泉町先人顕彰会）、菅原定雄さん（元清水集落公民館長）、花泉ロータリークラブ関係者のみなさま　等

＜参考文献＞　柳田国男監修・日本放送協会編（1948）『日本昔話名彙』／花泉町史編纂委員会（1984）『花泉町史（通史）』／佐々木徳夫（2005）『東北ふるさとの昔ばなし―「まてい爺とそそう爺」他八十七話―』／花泉社会科研究会（1976）『花泉の民話』／金沢村教育委員会（1956）『金沢郷誌』